

5 日本婦人及びその夫における HPV 感染の実態調査 — HPV 16型18型 DNAの PCR法による検出 —

大阪府済生会中津病院
中澤愛子, 柳田隆穂

【目的】Human papillomavirus(HPV) 16型18型は, 子宮頸癌や, その前癌病変 (CIN), 子宮頸癌由来の株化細胞に高率に認められており, 子宮頸癌発症に重要な働きをすることが示唆されている。しかし HPV感染の実態や, natural historyに関しては不明な点が多い。今回我々は PCR法により, 子宮頸部擦過細胞を用いて, HPV 16型18型感染を調べた。さらに夫婦間での感染状況を解明するための夫の尿中, 及び精液中の HPV感染を PCR法を用いて調べた。

【方法】354名の婦人から子宮頸部擦過細胞を採取し, DNAを抽出した。そのうち23例の夫から採尿し尿沈渣細胞より DNAを抽出, 又13例の夫から精液を採取しPercol重層法により遠心分離して得た上皮細胞より DNAを抽出後, PCR法を行った。増幅部位はHPV 16型18型の E₆ 領域である。PCR後, 特異性確認のため, Southern blot 法を施行した。

【成績】HPV 16型又は18型は子宮頸部に異常を認めない 205例中21例 (10%), STD群34例中7例 (21%), CIN 80例中22例 (28%), 子宮頸癌35例中16例 (46%) に検出された。妻が16型陽性であった8組中2組 (25%) の夫尿沈渣に同一typeの HPV感染を認めたが, 陰性であった14例では1例 (7%) のみが陽性であった。また精液中でも2例 (25%) に夫婦間でHPV 16型の同時感染が認められた。

【結論】健常婦人にも HPV感染が示され, 不顕性感染, 前癌病変, 癌患者の順に感染頻度が上昇することが示された。また, 夫婦間における HPV感染の実態が明らかになり, 子宮頸癌発生における sexual partnerの重要性が示された。

6 子宮頸部異形成の悪性化と HPV 感染 —パラフィン包埋標本を用いた PCR 法による retrospective study—

近畿大
福田武彦, 斉藤淳子, 竹山 淳, 住吉道興,
中谷宏行, 池田正典, 野田起一郎

【目的】子宮頸癌発癌機構において HPV の果たす役割は大きいといわれているが, HPVの生活環は不明点が多い。今回我々は, 異形成から follow up し progression, persistence, regressionした3群のパラフィン包埋標本を用いて HPV16/18 型との関連を retrospectiveに検討した。【方法】1962年から1973年迄に, 子宮頸癌集団検診において疑陽性で, 組織診で異形成の診断後に1-3カ月毎に follow up した progression群26例, persistence群3例, regression群16例のパラフィン包埋組織を検体とした。検体を薄切し, 脱パラフィン後に DNAを抽出, それを HPV 16/18の E₆ 領域を増幅する primer を使用し40 cycleの PCRを行った。増幅後に4%アガロースゲルで電気泳動を行ない, 特異バンドを検出し Dot blot hybridization を行った。【成績】1.異形成から follow up中に CIS あるいは, 子宮頸部浸潤癌に至った progression群26症例中13例 (50%) に HPV16/18 DNAを検出した。persistence, regressionした19症例では1例も, またいずれの時期にも HPV16/18 DNAを検出できなかった。2. HPV 16/18 DNAを検出した progression群13症例のうち5例 (38.5%) は, follow up中継続して検出され, CISに至った症例のうち HPV DNAが自然消退した例があったが, 浸潤癌に至った例では自然消退したものはなかった。3.癌化までの follow up期間と HPV感染の有無には, 明らかな関連はなかった。【結論】異形成の段階に於て HPV 16/18型感染者は, 高率に癌化する可能性があり嚴重に follow up する必要があると考えられる。